

Y 區2016年2月12日發行，香港：第22卷第2期（第2281頁發行），第22卷第2期（第2281頁發行），第22卷第2期（第2281頁發行）

春燈

2017 February

2月號



主宰の句

安立公彦

木枯や町空占むる醬油塔
(野田三句)

一茶辿りし路か冬日の下総郷

枯野道一茶の歩幅思ひ行く

漱石忌齡おろかに重ねきて

朝あさの石路の花友癒えよ



久保田万太郎の句

寒の雨芝生のなかにたまりけり

「吾が俳諧」昭和八年

万太郎句の鑑賞には、背景の把握を欠かす訳にはいかないが、初めて眼にした時の印象のみに留める。

一般的に、芝生の拡がる光景は気分のよいものである。にも拘わらず、ここでは枯芝の窪みと溜まった冷たい雨水に視線が集中する。ふと出現した水溜りに、何らか心に澱むこだわりを投影させているのだろうか。言外に脹らみのある句作り、の一端に触れた思いであった。

佐渡谷 秀一

久保田万太郎の句

歯いたくていたくならず切山椒

『久保田万太郎句集』昭和十七年

歯が痛い、痛い。歯痛が起くるのはいつだって楽しい週末や、年末年始の忙しい頃。そして決まって歯科は休診日。腫れたほつぺを冷やしたりしても夜は眠れず、気のふさぐ思いで我慢していました。万太郎先生の句に出会い、歯痛までもさらりと俳句にしてしまうユーモアに驚きと親しみを感じます。「切山椒」では、きつときりきりした痛みが走ったことと想像してしまいました。

渡辺若菜

燈下集



○

柴崎 甲武信

菊人形の濡れ場たつぷり水を差し
てのひらの縦皺殖やし冬立てり
夜半隠岐へ渡る船便神無月
盛土せし特攻基地や帰り花
西の市素うどんに舞ふ削りぶし

○

近藤 牧男

猫のほかは出払つてゐる小春かな
影もまたふくら雀でありにけり
水鳥の胸の押し合ふ夕日かな
花咲かすやうにみかんを剥きにけり
母のゐた頃の毛布の毛玉かな

○

吉澤 恵美子

色変へぬ松や平幹二朗黄泉へ発つ
青き自尊の枯蠅螂と目が合ひぬ
冬ざれや猫も通はぬ裏鬼門
音たてて一歩一歩の落葉道
初雪や白の静寂の円覚寺

○

卜部 黎子

序破急の風のまにまに木の葉散る
帰り花声なきこゑに耳澄ます
綿虫消ゆ動体視力くらまして
鴨鳴くや芭蕉を売りの川下り
枯蠅螂過信の鎌を空振りす

○ 卯木 堯子

茶の花の睦み合ふ蕊との曇り
葉脈はまるで手相や冬紅葉
電線の恋路や番の冬鴉
思案とはマスクに口紅つけぬ術
着ぶくれて十年日記まだ二年目

○ 深川 敏子

地に落つる物皆抱き山眠る
木の実落つ池の深さを知りたくて
しんしんと雪こんこんと読聞かす
白菜を割りて日向を広げけり
しろがねの霊峰富士を恵方とす

○ 和田 幸江

夫命日の未だ友より菊賜る
「孝女白菊」その心根や菊人形
終バスにひと待つ冬星一人占め
校庭の風吹く度に冬ざるる
古暦夫の齢をすでに越ゆ

○ 大室 恵美子

や、かな、けりは発句の臍や翁の忌
地獄絵の炎に勝る寺紅葉
とりあへずメモの重しの冬林檎
卓袱台に幸ありし日や冬灯
文化の日機械は敬語使ひけり

○ 尾野 奈津子

やすらげき今の幸せ日向ぼこ
妙薬は舌焼くほどの根深汁
瓦斯灯の光の四散一時雨
庄内平野は風吹くばかり冬ざるる
残照の波のゆらぎや鳩潜く

○ 小嶋 恵美

一湾の日差に浮きし冬の鳶
短日の砂を鳴かせるそぞろかな
かいつぶり顔を出すたび懐かしく
鞆祭歳月重き顔揃ふ
狐火に杓人そつと掌を合はす

○ 三宅文子

枯れきつてやすらぎいろの芒かな
雲流れ来てながれ去る翁の忌
熊手持ち甘味所へよりにけり
千両や名前の踊る祝幕（祝・芝翫）
熱爛やいつも味方と云うておく

○ 太田慶子

大寺の檜皮の厚し今朝の冬
人品を隠せざる方冬紅葉
夫へ妻にまこと勤労感謝の日
引売りの明るき声や山眠る
何くれの些事に追はるる十二月

○ 青柳雅子

冬衣鏡の中に装ひぬ
小春日や暖簾腕押す京ことば
雑踏の中で手繋ぐ西の市
現し世の長葱一本買ひにけり
歳晩のはたけば埃たつ身かな

○ 木多英美子

夕照の雲の片々神迎へ
甚五郎の竜・虎にまみゆ神の留守
立話に綿虫耳を立てにけり
眠る鳥潜く鳥ゐて沼小春
冬館一柱一窓ゆるぎなし

○ 小張志げ

小春日の雀弾んで光りけり
鳩潜く小さき水輪ひとつきり
ふくと汁真夜たしかむる手足かな
寄鍋や母似の姉が仕る
存命のはらから六人ふくと鍋

○ 江草礼

べつたらやつぎつぎ埋まる日程表
小春日や和太鼓乱拍子にて締める
ぎやうさんに菊使はれて静舞ふ
菊人形悲哀の歴史かくす紅
独り言に答は要らず虎落笛

当月集

安立 公彦選



○ 坂入 妙香

立冬や心に沁むる句集読む

マンシヨンの明り障子の昼下り

正面に沈む夕日や大枯野

一葉忌着丈短き黄八丈（葉を簾句）

一舟の一葉となりて一葉忌

○ 齋藤 晴夫

石の艶里山時雨いつ過ぎし

美しと近づき見上ぐ忘れ花

枯菊の静かに燃えて香を残す

木守柿入日の朱より濃かりけり

木椀の杳目の密や冬に入る

○ 河崎 國代

猫も居る山房古図や漱石忌

変身の母校の大樹聖樹の灯

過客なれば止むるすべなし冬董

耳底の不協和音や冬さるる

枯野行く影法師さへ頼りとす

○ 永井 恵子

菊人形裾に疲れや咲乱れ

時雨るるや掃除ロボット物をいふ

郷川に鴨の安堵や小波す

刈込みの後の焚火にしばし寄る

シベリアの極寒を知る父の匙

○ 中澤 弘

飼猫の家出を探す小春かな

旅仕舞ふ足湯のしじま冬の霧

柿紅葉影なす床の仏画拝す

陽光の包む安らぎ柿落葉

柵咲く路地を足早異邦人

春燈の句

安立 公彦選

瑠璃に澄む空を浮かべて秋の湖

東京 大西 武士

ひんやりと暮れゆく砂丘冬隣

手をあげて別れ言ふ友秋落暉

濡標遠く続くや秋の潮

冬空の夕焼かなし琥珀為す

福島 物江 康平

齒も金も無く晩秋の味覚かな

開戦忌ペン立て平和紡ぎけり

小春日や芝生よろこぶ児のはだし

湯たんぼの温みに触るる病む身かな

千葉 鶴岡 紀代

精神安定剤一粒ふやし冬に入る

清澄の一山燃ゆる冬紅葉

聖堂の祈りの鐘や冬深し

深川の寺や神社や石露の花

神奈川 山下 健治

門前の光あまねし銀杏散る

波郷忌や黄瀬戸でぐいと爛の酒

年の瀬や滾る土鍋と饒舌と

姉と手をつなぐ写真や七五三

短日やつぎつぎ増ゆる探し物

独り居や破れ障子もそのままに

後より追越してゆく落葉かな

公園のジャングルジムや寒鴉

自転車荷台にゆれる葱の束

行交へる留学生の冬帽子

とこしへに道を求めて枯野行く

小鳥来る今年生れの子も連れて

落葉焚兼ねて身辺整理かな

綿虫の何処へ行くのといつて来る

葦の穂の枯れ急がする波の音

とりどりの舟に埋もる海小春

真白かな衣通姫てふ冬薔薇



東京 山口 地翠

東京 佐藤まさ子

神奈川 葦原 葭切

神奈川 宮崎 洋

余言

安立公彦

蘆枯れてささめごとめく水の音

西川 保子

蘆も芒もともにイネ科の多年草。蘆はことに万葉の歌人に愛誦され、それは新古今の西行に詠み継がれ、俳人にも数多の秀句を為さしている。

この句「ささめごとめく水の音」には、調べとして古典の和歌に通う高邁さが読みとれる。「ささめごと」の仮名書きが善い。山里に残された湖畔の景だろう。時おり吹く風に揺れる枯蘆、それとともに湖面に水沫が立ち、声なきささやきが作者の記憶を呼ぶ。趣豊かな句だ。

一柱一窓の語る栄華や冬日和 佐藤 信子

千葉支部野田大会の句。野田市の観光案内に、「茂木佐邸物語」というパンフレットがある。野田の人は、茂木佐平治家を屋号で「茂木佐さん」と呼び親しんでいた、とあ

る。この句、その茂木佐邸の作品。大正三二年頃の建立。平成九年に国の登録有形文化財に指定されている。

「一柱一窓の語る栄華」の示す通り、邸内に入ると風格のある日本建築にしばし佇む。瓦も柱も特注とある。客間の前廊下は畳と板貼りの六尺幅。当時の女中衆は板貼りを歩いたという。『千葉地名の由来を歩く』の著者は、野田市発展のためには、市の名称を「キッコーマン市」とするくらいの発想があつていいという新聞記事を紹介している。そのキッコーマンの醸造こそ茂木家の尽力によるもの。掲出句の「栄華」の一端を示す家敷は、庭園とともに無料公開されている。大会当日は心地よい冬日和だった。この句を見てみると、風格のある邸宅がありありと思い浮かぶ。

叱られたやうに落葉の片寄れり 三上 程子

落葉の句は多いが、落葉の吹き溜りを、「叱られたやうに」と表現した句は初めてである。「片寄れり」とあるから、まだ吹き溜りまでには及んでいない状態だ。その僅かな群れの落葉の姿を想像すると、この上五中七の落葉が、あたかも感情あるもののように思われてくる。落葉という自然現象に生命を吹きこんだ作品と言えるよう。

祝婚や藪巻締むる縄二本 鈴木 直充

「藪巻」は、雪折れを防ぐために、竹や樹木を筵や縄でぐるぐる巻きにすること。この句、多分北国だろう。

身内の婚礼に近い。庭木の養生も必要だ。しかし兼六園のような雪吊までは要らない。そういうことから、「藪巻締むる」となった。それを支える「縄二本」がいい。縄と言っても長い短いはあるが、程ほどの長さというものが、この句から読みとれる。祝福を迎える、こころ配りの行き届いた作品と言えよう。如何にも雪国の句だ。

からすみや酔うては吟ず李白の詩 廖 運藩

「李白、字は太白、青蓮居士と号す。酒と仙と俠とを愛する超俗的な人柄と奔放な詩風とにより詩仙と称される。(岩波文庫中国名詩選より)」。李白と言えば、「床前に月光を見る、疑うらくは是れ地上の霜かと…」また「白髮三千丈、愁いに縁つて個のごとく長し」などを思い出す人が多からう。今ねからすみを肴に酒杯を上げている作者の吟ずるのは如何なる詩であらうか。

李白の詩を纏めて見たのは『新唐詩選(吉川・三好共著)』だった。酒の詩が多かった。しかし李白の詩の掉尾を飾る「古風」には感銘を受けた。李白の本意があると思った。今、久しぶりに「李白」の名を見て気持の高揚を覚えるのだった。「酔うては吟ず李白の詩」。将に壮年の詩である。

作者の詩こころの弥栄を願うばかりだ。

木枯に問ふ来し方に咎やある 竹 内 慶子

編集部の中心として勤しんで来た作者。二年前の手術の病根がこの冬に入り再発したようだとの報を受けた。同時発表の〈再発とふ二文字離れぬ落葉道〉の「落葉道」にしても、掲出句の「木枯」にしても、作者の思いが如何ばかり深いかよく分かる。

病むということは、反面生きている証でもある。作者はその「病」を、生の証の一つを成す創作に結集する。「来し方に咎やある」は、自身正しく生きた道を反舞する思いだ。晴れやかな青空を仰ぐ日も近いと思う。

おしたちてふ昭和の響き冬ぬくし 篠原 幸子

野田大会での作品。野田の駅を下りたとき、何とがらんとした町かと思つた。信号の無い道を大型車が通り過ぎる。しかし町の通りを一步横道に入ると、そこには忘れていた懐かしい町並が残っていた。作者も同じ思いだろう。

「おしたち」は醤油や煮物のつゆを指す。ここでは醤油だろう。駅前に建つ、キッコーマン醤油館。その一郭を高だかと占める醤油の仕込みタンク。そういう風景を見てみると、「おしたち」という言葉に残る「昭和の響き」が甦ってくるのだった。「冬ぬくし」がその思いを深める。